

会員インタビュー

竹内 礼子さん

2008年2月に夫を亡くした。単身赴任が8年7カ月続いていた。

趣味のオートバイを起こそうとして腰椎圧迫骨折し、腰痛が続いていた。仕事での体の消耗もかなりあったと思う。握力が20以下だった。1年ほど前から不眠を訴えていた。しかし帰宅するたびに、種々の治療をきちんと受けていたし、母親思いで、母がいるのに死を選ぶとは思ってもいなかったと竹内さんは語る。

連絡がとれなくなり、会社の人が寮の部屋に入ったら遺書があった。捜索願いを出した直後に発見され、帰らぬ人となっていた夫に直面した。すべての色がなくなってしまうような日々が始まった。

4カ月ほど過ぎたころ、横浜市主催の遺族のつどいに参加した。わかってもらえないだろうが……、と思いが胸の中にわき起こる気持ちを一気に話した。ちっとも違和感なく受け入れられたと感じた時に、何かが変わった。

さらに自分でも転換点だったと気がつくほどの変化は、わが子を亡くした母親たちの言葉を聞いた時に起きた。その頃、気持が通じ合わなくなってきた姑との関係に苦しんでいたが、わが子の死について切々と語る母親たちの言葉を聴き、姑の嘆きや苦しみに重なるものを感じた。70歳を



横浜市主催

超えた姑にとって、息子の死はどれほど辛いものか、自分のことで精一杯で思いやるゆとりがなかったことに思い至った。姑には、姑の悲嘆と苦しみがあふれる、辛いのは自分だけではなかったのだと実感した。

最初は、なるべく同じ立場の人と話したいと思った。ところが、同じようにご主人を亡くしても、年齢や家族関係、仕事や健康状態など、一概には言えないことばかりだ。竹内さんには子どもがいなかったので、亡くなった人が誰でもあれ、独り遺された立場の人との共通点が多いと感じた。グループ分けの

視点変わって、幸せ感じる日々

哀しみも多けれど、つどいで得た出会いに学び

時、亡くなった人ごとにわかるやり方——伴侶を亡くしたグループ、子どもを亡くしたグループというように——にしないで欲しいと提案してみた。立場の異なる人の話を聞くことによる気づきは大きく、他の参加者にも賛同してもらえたことは嬉しかった。

しばらくは「どうして？」「なんで??？」と、必死で問い続け、答えを探し求めた。単身赴任でも、夫とは毎

日必ず電話をし合い、週末には帰宅していた。母思いの孝行息子だったし、通夜の晩には多くの友人や会社の仲間が棺を囲み夫に声をかけてくれた。決して孤独・孤立の生活ではなかったはずだ。それなのに「なぜ？」と、見いだせない答えに身を裂かれる思いが続いた。どうして夫の苦悩に気づけなかったのかと自らを責め続けた。

ところがふとある時に、「そもそも自分のことだつてわからないことが多いのに、夫のすべてを知りたいと思うことは傲慢ではないか……」と気づいた。夫は自分とは別の人格、弁明も釈明もできない遠いところにいる夫の尊厳を踏みにじることをしているのでは

ないか……、そんな思いがわいてきた。自分が苦しいから、楽になりたいためへの問いかけではないのか？そんな気持ちになつてきた。しばらくして、苦しいならそのままでもいい、楽にならなくてもいいのだと思うようになった。

あれから2年3カ月……。最近、ご主人が自死により亡くなったということは問題ではなくなくなったと言う。亡くなり方ではなく彼がいなかったこと、その遠の不在の気持は言葉には表わしきれない深いものとなった。一方、日々の生活は孤独で楽しい

ことは少ないけれど、「私は幸せです」と竹内さんは続けた。失ったものも大きかったが、得たこともある。とりわけ横浜市の遺族の集いでのおたくさんの人たちの出会いには日々支えられている。その心境は、「私ほど不幸な人はいないだろう」↓「幸せではないけれど、不幸ではない」↓「つらい事も哀しいこともたくさん抱えているけれど幸せ」と変化していったと語る。

リストラされ、就職活動はうまく行かなかった。あなたは不要な人間と全人格を否定されたように感じたが、逆にこの自由な時間を有効に使ってみようという点字の講習を受け、点字ボランティアを始めた。目の不自由な人たちから学ぶことは多い。視覚を失った絶望感は想像を超えるものがあるが、出会った視覚障害の人たちの中にはそれぞれの生きがいと幸せを見だして澁刺と生きている人も多い。

社会に望むことは、自死遺族を特別視して欲しくないということ、先入観をもって接して欲しくない。いろいろな印刷物を見ると、遺族のつどいでは「辛い気持ちを話してください」というような趣旨のメッセージが多く、楽しかつたことや明るい話題を話してはいけないのかな？と感じる時がある。悲しみや辛さを抱えながらも、時間の経過で肯定的な気持ちもわいてくるし、自死遺族と言っても、一人ひとり違う。ひとくくりにはせずに、目の前にいる人に普通に接して欲しいと願っている。

(文責 杉本脩子)